

氏名	谷口 綾乃
授与した学位	博士
専攻分野の名称	歯学
学位授与番号	博甲第5689号
学位授与の日付	平成30年3月23日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科社会環境生命科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文の題目	Associations between dental knowledge, source of dental knowledge and oral health behavior in Japanese university students: A cross-sectional study (歯科保健の知識およびその情報源と歯科保健行動との関連についての横断研究)
論文審査委員	鳥井 康弘 教授      柳 文修 教授      稲葉 裕明 准教授

## 学位論文内容の要旨

### 【緒言】

適切な口腔保健行動を実施することによって歯周病を予防できる。歯科保健行動は様々な因子との関連が報告されており、その中のひとつに歯科保健の知識がある。大学生において、歯科保健の知識を多く有することは良好な歯科保健行動と関連がある。しかし、様々な媒体から知識を得ることができる現代において、その知識を得る情報源の違いによって歯科保健行動に違いがあるのかについてはまだよくわかっていない。そこで本研究では、日本の大学生において、歯科保健の知識およびその情報源と歯科保健行動との関連について調べることを目的とした。

### 【対象・方法】

2014年4月に岡山大学保健管理センターで実施された新入生健康診断（以下、健診）および新入生歯科健診を受診した岡山大学新入学生2,270名を対象とした。このうち25歳以上の者（25名）およびデータ欠損のある者（25名）を除いた2,220名を分析対象者とした。

自己記入式質問票を用いて調査した。歯科保健の知識について、歯科保健に関する9単語（歯石、歯垢、デンタルフロス、シーラント、歯周病、顎関節症、フッ化物洗口、フッ化物歯面塗布、8020運動）について説明できるかを調べた。知識の情報源について、該当する情報源を最大3つまで選択する方法で調べた。選択肢は歯科医院、学校、テレビ、家族、インターネット、新聞、友人、書籍とした。歯科保健行動について、1日の歯みがき回数（1回以下/2回以上）、デンタルフロス使用（はい/いいえ）、過去1年間の歯科定期受診（はい/いいえ）を調べた。

口腔内診査では、Community Periodontal Index (CPI) を用いて代表10歯の歯周状態を調べた。

統計分析には、カイ二乗検定およびロジスティック回帰分析（強制投入法）を用いた。ロジスティック回帰分析では、それぞれの歯科保健行動を従属変数として、良好な歯科保健行動を有するオッズ比 (OR) および95%信頼区間 (95%CI) を算出した。説明変数として、年齢、性別、歯科保健行動の知識、知識の情報源を投入した。歯科保健の知識および知識の情報源については、単変量解析で歯科保健行動による差が有意であったものを説明変数として選択した。

## 【結果】

57.0%の大学生が、歯科保健の知識の情報源が歯科医院であると回答した。次いで学校（39.2%）とテレビ（29.1%）が多かった。

1日の歯みがき回数は、歯科保健の知識および知識の情報源と有意な関連は認めなかった。デンタルフロスを使用する者はそうでない者と比較して、6単語（歯垢、歯石、歯周病、デンタルフロス、フッ化物洗口およびシーラント）についての知識を有する者の割合、および歯科医院と家族から知識を得た者の割合が有意に高かった。歯科定期受診を受けた者はそうでない者と比較して、4単語（歯石、デンタルフロス、フッ化物洗口、シーラント）についての知識を有する者の割合、および歯科医院から知識を得た者の割合が有意に高かった。

ロジスティック回帰分析の結果、歯科医院から知識を得ている者は、そうでない者と比較して、デンタルフロスの使用のORが1.47（95%CI：1.12-1.94）、歯科定期受診のORが2.92（95%CI：2.22-3.85）であった。一方で、学校およびテレビから知識を得ている者は、そうでない者と比較して歯科定期受診のORが、それぞれ0.69（95%CI：0.53-0.89）および0.71（95%CI：0.53-0.89；0.54-0.94）であり、学校およびテレビから知識を得ている者は歯科定期受診しない者が有意に少なかった。

デンタルフロスを使用している者および歯科定期受診を受けている者は、ブローミング時の出血割合が有意に少なかった。

## 【考察】

歯科医院から歯科知識の情報を得ることは、良好な歯科保健行動（デンタルフロスの使用および歯科定期受診）に寄与していた。さらに、良好な歯科保健行動をする者は、良好な歯周状態であった。歯科医院における歯科保健指導は行動変容を促すことができることから、歯科医院は大学生においても良好な保健行動のために情報を得る場として最も効果的であることが言える。

一方で、今回の調査では学校およびテレビは歯科定期受診と負の関連がみられた。学校における歯科保健教育の介入研究は多くなされているが、その結果はいまだ一定の見解を得られていない。また、マスメディアでの歯周病予防キャンペーンでは保健行動を変容させるには至らなかった。学校やテレビは歯科保健行動を定着させるのに十分な情報提供を行えていないと考える。

## 【結論】

日本の大学生において、歯科医院から歯科知識の情報を得ることは、良好な歯科保健行動（デンタルフロスの使用および歯科定期受診）と関連があった。

## 論文審査結果の要旨

適切な歯科保健行動を実施することによって、歯肉炎等、可逆的歯科疾患の改善や非可逆的歯科疾患の予防が期待できる。大学生において、歯科保健の知識を多く有することと適切な歯科保健行動との関連が指摘されているが、様々な媒体から歯科保健の知識を得ることができる現代において、その知識を得る情報源の違いが歯科保健行動にどのような変化をもたらすかはよく分かっていない。そこで本研究では、日本の大学生において、歯科保健の知識およびその情報源と歯科保健行動との関連について調べることを目的とした。

2014年4月に岡山大学で実施された新入生歯科健康診断を受診した2,270名を調査対象とした。自己記入式質問票を用いて歯科保健の知識、知識の情報源、歯科保健行動を調査した。歯科保健の知識については、歯科保健に関する9単語（歯石、歯垢、デンタルフロス、シーラント、歯周病、顎関節症、フッ化物洗口、フッ化物歯面塗布、8020運動）について説明できるかはい／いいえで問うた。知識の情報源については、歯科医院、学校、テレビ、家族、インターネット、新聞、友人、書籍のなかから該当する情報源を最大3つまで選択させた。歯科保健行動については、1日の歯みがき回数（1回以下／2回以上）、デンタルフロスの使用（はい／いいえ）、過去1年間の歯科定期受診（はい／いいえ）を調べた。対象を若年者に絞るために25歳以上の者（25名）およびデータ欠損のある者（25名）を除いた2,220名を分析対象者とした。統計分析には、*t*検定、カイ二乗検定およびロジスティック回帰分析を用いた。ロジスティック回帰分析では、それぞれの歯科保健行動を従属変数として、良好な歯科保健行動を有するオッズ比（OR）および95%信頼区間（CI）を算出した。説明変数として、年齢、性別、歯科保健行動の知識、知識の情報源を投入した。歯科保健の知識および知識の情報源については、単変量解析で歯科保健行動との関連が有意であったものを説明変数として選択した。

ロジスティック回帰分析の結果、歯科医院から知識を得ている者は、そうでない者と比較して、デンタルフロスの使用のORが1.47（95%CI：1.12-1.94）、歯科定期受診のORが2.92（95%CI：2.22-3.85）であった。歯科医院は大学生においても良好な歯科保健行動のための情報を得る場として有用であり、歯科医院における歯科保健指導は行動変容を最も促すことができることが示された。一方、学校およびテレビから知識を得ている者は、そうでない者と比較して歯科定期受診のORが、それぞれ0.69（95%CI：0.53-0.89）および0.71（95%CI：0.54-0.94）であった。過去には、学校やテレビにおける保健指導介入の効果は歯科保健行動にまで影響しないとの報告もあり、学校やテレビは情報源として、歯科保健行動を定着させるのに十分な情報提供を行えていない可能性がある。

本論文は、大学生において、歯科保健行動の関連要因として歯科保健の知識の情報源に着目した初めての研究であり、知識を得る情報源によって保健行動に差があるという新たな知見を得た。よって、審査委員会は本論文に博士（歯学）の学位論文としての価値を認める。